

Helicobacter pylori ピロリ菌

ピロリ菌は、胃に生息している。その役割についてはよくわからない。何かあるはずであるが、なぜ存在するのが理解できないのである。いない人でも普通の生活ができています。

胃には、胃液が分泌されている。胃液は、口から入ってくる飲食物を液状にしたり、食物に混じっている雑菌を殺菌するため、つまりは濃塩酸である。

で、こんな強い酸の中には生物がいる「はずがない」と長く考えられてきた。(実際には、生命の誕生の実験をしていたとき、塩酸の海と雷が重要な役割をもっているらしいことは報告されていたが。)

1980年頃、オーストラリアの研究者が胃液の中にスピロヘータ様の生物がいるらしいことを発見し、さらにこの菌が尾を持っていてヘリコプターのように旋回させながら位置移動をすることから、*Helicobacter pylori* (胃から十二指腸への移行部を幽門というが、幽門のことを Pylorus という。その胃側を幽門前庭部といい、この辺りに生息することからこの名前がつけられた。)

さて、胃潰瘍の原因は、胃酸過多に仕事や社会・家庭からのストレス (ストレスという言葉も実体がない場合が多く、また悪い意味で使用されることが多過ぎるのだが、) がひきがねになって発生すると考えられてきた。たとえば副腎皮質ホルモンを治療に使用しているときステロイド潰瘍という言葉さえ生まれた。胃潰瘍の発生原因だけでゆうに一冊の本ができるくらい、諸説紛々であった。ところが *H. pylori* すなわちピロリ菌の発見以来わずか数ページを要するのみで、**胃潰瘍の原因はピロリ菌による胃粘膜の持続的な炎症**という一行で終わりである。さらには、当然ながら胃がんとの相関も強く示唆されるものである。強く示唆されるものである。そして、*H. pylori* を発見したことにより、発見者がノーベル賞をもらったのは、2005年のことである。(ノーベル賞判定委員会の悠長なこと)

胃・十二指腸に悪性リンパ腫 (リンパ節の悪性腫瘍。ふつう、

悪性リンパ腫の治療は抗がん剤を使ったり、手術で除去するのだが）ができることがある。このとき、ピロリ菌を退治（除菌）すると自然治癒することがある。

このあたりは、まあ連想が働いて考えられないこともないのだが、特発性血小板減少性紫斑病（ITP）という病気がある。自己免疫疾患（別に改めて書くが）の一種であるが、通常、副腎皮質ホルモンで治療が必要な血液を凝固させるのに不可欠の**血小板が減少する病気**である。ときに脳出血のために亡くなる患者もいる。副腎皮質ホルモンが効かないときにはγグロブリン製剤を大量に使わねばならないことがあり、58万円×投与日数という莫大な治療費が必要なことがある。脾臓を摘出する手術が必要なこともある。このITP患者でピロリ菌を退治すると、なぜか血小板数が正常に戻ることがあるのである。

あるいは、心筋梗塞が減ったという報告もあるが、無論反対意見もある。まだよくわかっていないところがあり、思いがけない作用を持っている可能性がある。

だから小生は、**ピロリ菌をみたら直ちに殲滅を企てる。・・・どんな変化が生じるか、楽しみではある。**

ピロリ菌を退治するとき、2つ問題がある。ひとつは、抗生物質を2種類しかもかなり大量を内服することから、これらの直接の作用（胃の不快感や嘔気・嘔吐）や交代菌現象がみられることがあること。

もうひとつは、逆流性食道炎の頻度が増加するのではないかと言われていることである。それでも、ピロリ菌を退治してきた患者さんから、胃の調子がすこぶるよくなった、という話をよく聞く。（ただし、ピロリ菌を殲滅しても胃潰瘍の再発がゼロになるわけでもないが、その頻度は間違いなく減っている。）